

第一章 『正信偈』について

私たち真宗門徒が親しんでいる『正信偈』は親鸞聖人（一一七三〜一二六二）の著である『教行信証』（『顕浄土真実教行証文類』の行巻にある偈文です。正式には『正信念仏偈』といいます。私なりに読んでいきたいと思えます。多くの先生方のお話や本を参考にしましたが、名前をあげることが省略いたします。

『正信偈』は一行を一句といいます。一句が七文字、全体で百二十句、八四〇字からなる漢詩です。「偈」とは、仏徳を讃嘆する歌という意味です。「正信念仏」とは、「念仏を正信する」「正信の念仏」「正信と念仏」という意味が考えられます。「正信」とは「正しい信心」です。阿弥陀仏の願い（本願）が私に届いて信心となり、そうして私の口から「南無阿弥陀仏」という仏の名前（名号）が出るのです。それが称名念仏です。

本願とは、一切の衆生を救うという阿弥陀仏の誓いです。親鸞聖人が作られた和讃に、

十方微塵世界の

念仏の衆生をみそなわし

摂取してすてざれば

阿弥陀となづけたてまつる

とあるように、摂取不捨（摂め取って捨てない）という願いが南無阿弥陀仏にこめられています。摂取不捨を竹中智秀先生は「見捨てず、嫌わず、選ばず」と表現されています。

『正信偈』の全体の構成を説明しますと、大きく三つに分かれます。最初の「帰命無量寿如来 南無不可思議光」の二句を総讃といい、帰敬偈ともいいます。仏に帰依する気持ちを親鸞聖人が述べた個所です。「法蔵菩薩因位時」からが依経段といつて、お釈迦さまが説かれた南無阿弥陀仏のいわれが、主に『無量寿経』に依って説明されています。「必至滅度願成就」までが弥陀章、その次の「如来所以興出世」から「是人名分陀利華」までが釈迦章です。そして、「弥陀仏本願念仏」から「難中之難無過斯」を結誠といっています。

後半の「印度西天之論家」からを依釈段といえます。インド、中国、日本の七人の高僧（龍樹、天親、曇鸞、道綽、善導、源信、源空）がどのように本願の教えを受け止められたかが述べられています。最後、「弘経大士宗師等」からが結勧といつて、お念仏の教えを勧めて終わります。

『教行信証』には、『正信偈』の前に、

しかれば大聖の真言に帰し、大祖の解釈に閱して、仏恩の深遠なるを信知して、正信念仏偈を作りて、曰わく

と書かれています。「大聖」とはお釈迦さまのことです。「真言」とは『無量寿経』の

教えに示された真実の言葉です。「大祖だいそ」とは七高僧しちこうそうのことです。親鸞聖人はお釈迦さまから七人の高僧を通して真実の教えをいただかれたのです。

『正信偈』には浄土真宗の教えが凝縮されているので、かなり難解です。また、なじみのない言葉が多いですし、仏教の言葉は通常の意味と異なるものもあり、わかりにくいと思います。私なりに考えたことを聞いていただければと思います。

第二章 総讚そうざん（帰敬偈ききょうげ）

帰命無量寿如来 無量寿如来に帰命し、
南無不可思議光 不可思議光に南無したてまつる。

（限らない命の阿弥陀仏（無量寿如来）におまかせします。思いを超えた光（不可思議光）の阿弥陀仏をよりどころとします）

帰命きみょう 敬い信じて順したがうこと。

「南無」は「namas」というサンスクリット語の音写で、中国の言葉に訳したのが「帰命きみょう」です。「帰」は「したがう」「依よる」という意味です。「帰命」には「仏のおおせ（命令）を敬い順したがう」（本願招喚しょうかんの勅命ちよくめい）という意味があります。念仏を称えてほしい、浄土に生まれたいと願ってほしいという仏の呼びかけ（勅命）にうなづくことが帰命です。

「阿弥陀あみだ」とはインドの言葉で「Amitābha」「Amitayus」で、「無量の光」「無量の寿」という意味です。「無量寿」「不可思議光」「無碍光むげこう」などと訳されています。「南無阿弥陀仏」の訳が「帰命無量寿如来」と「南無不可思議光」ですから、この二句は同じ意味です。「寿」は時間、「光」は空間を表すとされます。無量ですから、阿弥陀仏の本願は時間や空間に限りがありません。竹中智秀先生は「いつでも、どこでも、誰にでも」ということだと話されていました。

私たちは「南無阿弥陀仏」と称えても、「無量寿」や「不可思議光」という阿弥陀仏のはたらきをいただいている実感を持っているでしょうか。浮世の泥にまみれ、煩惱ぼんごの海に翻弄ひんりやうされて生きている私たちは、有名になりたい、金儲けがしたいという名聞みやうもん利養りやうの心に振りまわされ、暗闇の中を手探りでさまよっているようなものです。そのような私にお釈迦さまや親鸞聖人たちは「阿弥陀仏をたのみなさい」「真実に生きる道を求めなさい」と呼びかけられています。

第三章 依経段えきやうだん

一 弥陀章

① 法蔵の物語

法蔵菩薩因位時 法蔵菩薩の因位の時、

在世自在王仏所 世自在王仏の所にましまして、
観見諸仏浄土因 諸仏の浄土の因、
国土人天之善悪 国土人天の善悪を観見して、
建立無上殊勝願 無上殊勝の願を建立し、
超発希有大弘誓 希有の大弘誓を超発せり。
五劫思惟之授受 五劫、これを思惟して授受す。
重誓名声聞十方 重ねて誓うらくは、名声十方に聞こえんと。
(ある国の王が世自在王仏の教えを聞き、さまざまな仏の国土の成り立ちと、それらの国や人々の善いところ、悪いところを見て、自分はこのような国を作ろうと、この上もない願いを起こして法蔵菩薩と名のりました。そして、五劫という長いあいだ思惟し、善いところを選び、悪いところを捨てました。そして、重ねて「私の名が十方に聞こえるように」と誓われました)

法蔵菩薩 阿弥陀仏になる前(因位)の名前。
因位 仏になるために行に励み、願を立てる段階のこと。菩薩の位。仏の位が果位。
観見 よく見る事。

浄土 仏の国土のこと。阿弥陀仏の浄土が極楽浄土。安樂世界、無量光明土、安養界ともいう。
殊勝願・弘誓 本願のこと。本誓、誓願、弘願ともいう。
超発 他の仏より超えた願いをおこすこと。
授受 摂取ともいう。摂めとって導くこと。
名声 名号ともいう。仏の名前。南無阿弥陀仏のこと。

こんな物語が『無量寿経』に説かれています。

ある国の国王が世自在王仏の説法を聞いて、心に悦びの気持ち起き、覚りを得ようと菩提心を起こした。そして、国を捨て、王の位を捨て、出家して沙門になり、法蔵と名のつた。浄土を建立して衆生の苦を取り除こうと誓う法蔵菩薩のために、世自在王仏は二百一十億の諸仏の浄土を見せる。五劫という途方もなく長いあいだ思惟し、法蔵菩薩は諸仏の浄土の善いところを選び、悪いところを捨て、四十八の願を發した。そうして極楽浄土を建立し、法蔵菩薩は阿弥陀仏となった。さらに、南無阿弥陀仏という名前が十方に聞こえるようにという誓いを立てた。

この阿弥陀仏の物語は実際にあつたわけではありません。お釈迦さまはこの物語によつて何を伝えようとされたのでしょうか。阿弥陀仏の物語はお釈迦さまをモデルとしています。お釈迦さまも覚りを求めて出家し、そうして仏になられました。仏になるために修行をしているのが菩薩です。菩薩は自分が覚ることよりも、すべての衆生を救うという願いを優先します。仏法の根本には、すべての人の苦悩を解決したいという法蔵菩薩の願いがあるのです。

「浄土」とは清浄国土を略したもので、仏の国土のことです。浄土を本願酬報土と

もいますが、こういう国を作りたいたいという菩薩の願いが成就したのが浄土です。阿弥陀仏の浄土が極楽浄土です。浄土は清浄な土ですから、清浄なものだけが住むと考
えがちですが、選別し排除するならば、煩惱にまみれた私たちは往生できないことにな
ります。しかし、浄土は清浄ではないものによって穢される世界ではありません。ど
んなものをも受け入れ、清浄にならせる世界です。

② 十二光

普放無量無辺光 あまねく、無量・無辺光、
無碍無対光炎王 無碍・無対・光炎王、
清浄歡喜智慧光 清浄・歡喜・智慧光、
不断難思無称光 不断・難思・無称光、
超日月光照塵刹 超日月光を放って、塵刹を照らす。
一切群生蒙光照 一切の群生、光照を蒙る。
（無量光、無辺光、無碍光、無対光、光炎王、清浄光、歡喜光、智慧光、不断光、難
思光、無称光、超日月光にたとえられる十二の光をあまねく放ち、無数の国を照らす
ので、一切の生き物（群生）は阿弥陀仏の光のさまざまなはたらきを受けるのです）

塵刹 じんせつ 塵は無数。刹は国土。国土の数が多いことを塵にたとえる。
群生 ぐんじょう 迷いの衆生のこと。

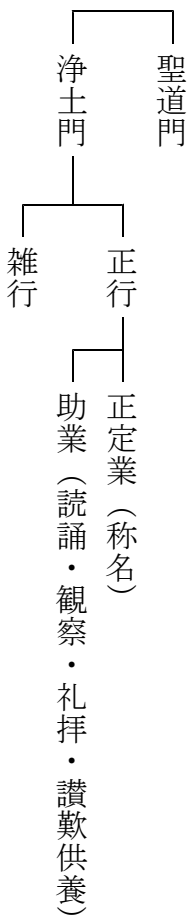
阿弥陀仏はさまざまな功德の光で数限りない国土を照らします。十二光といつて、
阿弥陀仏のはたらきが十二種類の光でたとえられています。無量光（量ることのでき
ない）、無辺光（誰にも平等に照らす）、無碍光（さまたげられない）、無対光（他と比
べられない）、光炎王（煩惱を燃やし尽くす）、清浄光（貪欲から離れさせる）、歡喜光
（瞋恚（怒りや妬み）から離れさせる）、智慧光（無明（道理に暗いこと）を破る）、
不断光（断つことのない）、難思光（人の思いを越えた）、無称光（言葉で説明できな
い）、超日月光（太陽や月の光を超えた）の十二です。

③ 行と信と証

本願名号正定業 本願の名号は正定の業なり。
至心信樂願為因 至心信樂の願を因とす。
成等覺証大涅槃 等覺を成り、大涅槃を証することは、
必至滅度願成就 必至滅度の願成就なり。

（阿弥陀仏の願いが込められてる名号（南無阿弥陀仏）を称えることは、間違いなく
往生するための正しい業（行い）であり、至心信樂の願（第十八願）を因とします。
そして、大涅槃を得ることは、必至滅度の願（第十一願）が完成したということだ
す）

正定業 正しく往生が決定する業（行為）のこと。
 等覚 ①仏の覚り。②覚りと等しいが覚りではない。菩薩の境地。
 涅槃 煩惱の炎が吹き消された状態。覚りのこと。
 滅度 涅槃の漢訳。煩惱を滅して、覚りの世界へ渡ること。



名号とは名前のことです。私たちの名前には親の願いが込められています。同じように、南無阿弥陀仏という名前には、衆生を救うという阿弥陀仏の願い（本願）が込められているのです。「南無阿弥陀仏」と名前を声に出して称えることが称名念仏です。仏教は、聖道門（自力で覚る道）と浄土門（阿弥陀仏の本願によって浄土に往生して仏になる道）の二つに分けられます。浄土門はさらに、正行（浄土往生に導く正しい行）と雑行（正行以外の行）に分けられます。正行には五種あります。正定業とは、正しく往生が決まる業（行為）のことで、称名が正定業です。読誦・観察・礼拝・讚嘆供養の四つを助業といいます。

真実（如）から私へのはたらきを如来（仏と同じ意味）といいます。南無阿弥陀仏という名前となって真実が私に届くのです。そして、私の口から「南無阿弥陀仏」と声が出ます。称名とは、仏のよびかけを聞き（聞名）、それに応えて念仏を称えることです。

「至心信樂の願」は、『無量寿経』に説かれている四八ある阿弥陀仏の本願のうちの第十八願のことです。「至心」と「信樂」を親鸞聖人は、

如来の御ちかひの真実なるを至心ともうすなり。（略）如来の本願、真実にましますを、ふたごころなくふかく信じてうたがわざれば、信樂ともうすなり。（『尊号

真像銘文』

と説明されています。真実は仏にあります。私に真実はありません。私たちは疑いの心を離れることができず、阿弥陀仏の願いを素直に受け入れられないのですから。

信樂は、仏にならんとねがうともうすごころなり。『唯信抄文意』とあります。「信樂」とは信心のことで、「樂」は「ねがう」という意味です。浄土真宗の信心や回向の意味は通常とは大きく異なります。私が阿弥陀仏を信じていることが信心だと思われがちですが、私が起こした信心なら、人によって信心は異なります。そうではなく、信心とは阿弥陀仏から私に回向された（たまわった）まことの心です。本願にこめられた仏の心をいただくのですから、すべての人の信心に違いはありません。阿弥陀仏の心をいただき（信心）、念仏を申せば（称名）、浄土へ往生して仏になる身（成仏）と定まる（正定聚）ことが誓われています。

往生とは死ぬことだと思われていますが、これも間違いです。仏の国（浄土）に生まれることです。なぜ浄土に往生することを願うかというと、私が仏になるためです。

では、往生はいつなのでしようか。死んでからか、信心をいただいた今なのか。親鸞聖人は現生正定聚と説かれます。現世において浄土に往生して仏になることが定まるということですから、往生がいつかということにこだわる必要はありません。信心をいただくことが肝心です。

眞実信心は妄信とは違います。阿弥陀仏にすがれば死んでから極楽に行けると信じることが、まことの信心ではありません。自分はどのように生きているのか、これでもいいのか、そういった問いを持つことに、仏の教えに従って生きる仏教徒としての歩みが始まるのです。

「等覚」には、「平等な覚り」、つまり仏という意味と、「仏の覚りと等しい」、つまり仏とほとんど同じという二つの意味があります。「成等覚」を親鸞聖人は、

成等覚というは、正定聚のくらいなり。(『尊号眞像銘文』)

と説明されています。「正定聚」とは、仏になることが決定している人たちという意味ですから、ここでの「等覚」とは仏と等しい、つまり仏ではないけど、仏と同じだということなのです。

第十一願の「必至滅度の願」は、念仏を称えた者が正定聚の身となり、やがて滅度に至ると誓われています。「涅槃」はインドのサンスクリット語の音を漢字に当てはめた言葉ですが、中国語に翻訳したのが「滅度」です。「滅」は煩惱を滅して仏になると、そして「度」は「渡る」ですから、迷いの世界から覚りの世界に渡るという意味になります。しかし、阿弥陀仏によって救われるわけですから、私が「渡る」ではなく、阿弥陀仏が「渡す」です。

「滅」とは肉体が減することではありません。もとの意味は制御です。煩惱をなくすのではなく、コントロールする。煩惱が起きても振りまわされることがないのが「滅」です。親鸞聖人は阿弥陀仏の救い（浄土往生）を死後とせず、今を生きる教えとしていただかれています。

ここは特に難解ですが、浄土真宗の教えの基本が説かれている大事なところです。

二 釈迦章 ① 出世本懐

如来所以興出世 如来、世に興出したまうゆえは、
唯説弥陀本願海 ただ弥陀本願海を説かんとなり。

五濁悪時群生海 五濁悪時の群生海、
応信如来如実言 如来如実の言を信ずべし。

能発一念喜愛心 よく一念喜愛の心を発すれば、
不断煩惱得涅槃 煩惱を断ぜずして涅槃を得るなり。

凡聖逆謗斉回入 凡聖、逆謗、ひとしく回入すれば、
如衆水入海一味 衆水、海に入りて一味なるがごとし。

(釈迦如来が世に出られたのは、ただ阿弥陀仏の本願を説くためです。五濁悪時といわれる時代に住む衆生は釈迦如来の言葉を信じるほかありません。教えを喜ぶ心が起

きた人は、煩惱を断ち切ることなく涅槃を得ることができません。川の水が海に入ると同じ味になるように、凡夫と聖人、五逆や謗法の人も本願の海に入れば等しく救われます。

五濁ごじよく 劫濁こうじよく（時代の汚れ、災害や戦争など）、見濁けんじよく（間違った思想がはびこる）、煩惱ぼんのう濁じよく（煩惱が盛んになる）、衆生濁しゆじやうじよく（人間の質の低下）、命濁みやうじよく（寿命が短くなる）の五つの濁りのこと。

喜愛心 阿弥陀仏による救済を喜ぶ心。信心のこと。

凡聖ぼんしやう 凡夫と聖者。

逆謗ぎやくぼう 五逆罪ごぎやくざい（父を殺す、母を殺す、阿羅漢あらかんを殺す、仏の身を傷つける、教団を和合を破る）を犯した者と仏法ぶつぽうを謗そしる者のこと。

回入えにゆう 回心えしんして仏の教えに帰依すること。

衆水しゆすい さまざまな川の水のこと。

お釈迦さまはなぜこの世に生まれてこられたのは、阿弥陀仏の本願を説くためだと、親鸞聖人は受け止めました。これを出世本懐しゅつせほんがひといえます。そして、五濁悪時という時代に生きる人たちはお釈迦さまの真実の言葉を信じなさいと勧められました。

お釈迦さまは菩提樹の下で覺りを開かれたのですが、自分が覺った縁起の道理（法）を人々は理解できないだろうと思い、説法することを躊躇ちゆうじゆされました。しかし思い直して、縁起の法を人々に説かれたのです。そして、すべての人を苦悩から解放させることを誓われました。お釈迦さまのその願いが阿弥陀仏の本願として示されています。

普通は、煩惱を断つことが涅槃、すなわち仏になることだとされます。ところが、煩惱を断たなくて涅槃を得ると説かれました。これは、凡夫も聖者も、仏や教えを諍しやうる人も、信心をいただいたなら、我が身をたのむ心が転じられて本願に帰入し、人生が往生極樂の歩みになるということを表しています。念仏の教えに遇えば、煩惱は私を迷いの世界から救い出す手がかりとなるのです。

親鸞聖人は「本願海ほんがんかい」「群生海ぐんじやうかい」と、海という言葉をよく使われます。海はあらゆる川が流れ込み、清濁を問わずにすべてを等しく受け入れます。煩惱の世界に生き、自分の思い通りにしようとして悩み苦しむ私ですが、いろんな川の水が海に入ればすべて塩辛い味になるように、誰であろうと仏道を歩む者となるのです。このように迷いの心がひるがえることを回心えしんといえます。五濁という時代の娑婆世界に生きる私たちのあり方が、お釈迦さまの教えによって、すべての人々と共に生きるように転じていくのです。

② 摂取の光明

摂取心光常照護 摂取の心光、常に照護したまう。

已能雖破無明闇 すでによく無明の闇を破すといえども、

貪愛瞋憎之雲霧 貪愛・瞋憎の雲霧、

常覆真信心天 常に真信心の天に覆えり。

譬如日光覆雲霧 たとえば、日光の雲霧に覆わるれども、

雲霧之下明無闇 雲霧の下、明らかにして闇きことなきがごとし。

獲信見敬大慶喜 信を獲れば見て敬い大きに慶喜せん、

即横超截五惡趣 すなわち横に五惡趣を超截す。

(どんな衆生も撰取して捨てない阿弥陀仏の光が常に照らし護っているのです、すでに無明の闇は破れています。しかし、むさぼりや怒り、憎しみの雲や霧は常に真実の信心を覆っています。しかし、太陽が雲や霧に覆われても、雲や霧の下は光が届いて明るいと同じです。信心を獲れば、見て敬い大きに慶喜し、ただちに横さまに五惡趣を断ち切ります)

無明 道理に暗いこと。愚か。

横超 横は他力、超は速やかに覺りを得ること。

五惡趣 地獄、餓鬼、畜生、人、天という五つの迷いの世界。惡趣を惡道ともいう。

どんな人も決して見捨てないという撰取不捨の願いは光でたとえられます。光は闇を破ります。念仏の教えによって我執の心から解き放たれ、共に生きる世界(浄土)が開かれるのです。しかし、真実の教えに出遇いながらも、むさぼりや怒りの雲や霧に覆われているので、自分中心で生きています。しかも、そういう自分の姿に気づかないし、認めようとしません。これではいけないと頭でわかっていても、我が身をどうすることもできないのです。

しかし、雲の切れ間から一筋の光が差し込んで、私の姿を照らす瞬間が誰にもあるでしょう。そのように、煩惱によって眼がさえぎられていても、本当にこれでいいのだろうか、自分の生き方に疑問を持ち、自分の身を見つめ直すことがあります。その時、光に出遇えたのです。

光といっても、昼間の光のようにすべてがはっきり見えるわけではありません。親鸞聖人は、

信心をえたる人をば無碍光仏の心光、つねにてらしまもりたまうゆえに、無明のやみはれ、生死のながきよ、すでにあかつきになりぬとしるべしとなり。(『尊号

眞像銘文』)

と、あかつき 暁にたとえています。暁とは夜明け前の光です。ぼんやりとでも道は見えてきます。雲や霧にさえぎられ、真実を見失って流されて生きる私ですが、阿弥陀仏の願いは私に届いているのです。

私たちは地獄、餓鬼、畜生、人間、天という五つの惡趣(苦しみの世界)に生きています。これに修羅を加えたのが六道ろくどうです。いずれも迷いの世界です。死んだ後に業(行い)の報いで六道のどこかに生まれ変わるのではありません。今の私たちの生き方、社会のありさまが六道という形で表現されているのです。

地獄とは孤独な世界。餓鬼とは欲望に振り回される生き方。畜生とは寄りかかって生きていくあり方。修羅とは争いの世界。人間は言葉の必要な世界。天とは自己満足の世界です。戦争、飢餓は地獄や餓鬼を作り出します。私たちはこの六つの状態をふらふらしています。物事がうまくいっているときは有頂天になりますが、思うにまかせないと奈落（地獄）の底に沈んでしまいます。

そうした私たちのあり方を教えてくれるのが念仏です。善導は、

経教はこれをたとうるに、鏡のごとし。〔観無量寿経疏〕

と、お経は私の姿をうつす鏡のようなものだと教えてくださっています。お経によって真実に目覚め、自分の姿を確かめるのです。浄土の世界に目覚めることで、迷いの世界を一気に飛び超えることを横超おうちようといえます。といっても、我執の心がなくなるのではありません。阿弥陀仏にまかせることによって、とらわれている私のあり方に気づかされていくのです。南無阿弥陀仏は自分の思いを叶えるための呪文ではありません。

③ 蓮華のような人

一切善悪凡夫人 一切善悪の凡夫人、
聞信如来弘誓願 如来の弘誓願を聞信すれば、
仏言広大勝解者 仏、広大勝解の者と言えり。
是人名分陀利華 この人を分陀利華と名づく。

（一切の善人や悪人が阿弥陀如来の弘誓（本願）を聞信すれば、仏は勝れた智慧のある者とほめ、分陀利華のような人と名づけます）

勝解しょうげ すぐれた理解。
分陀利華かんだりけ 白蓮華のこと。

「一切善悪凡夫人」とは、一切の善人、悪人である凡夫ということですから、どんな立派な人、優れた人であってもみな凡夫です。「凡夫」のことを親鸞聖人は『一念多念文意』で、

凡夫というは、無明煩惱われらがみにみちみて、欲もおおく、いかり、はらだち、
そねみ、ねたむころおおく、ひまなくして臨終の一念にいたるまでとどまらず、
きえず、たえず。

と説明されています。凡夫には清浄な心、真実の心はありません。

ここで「聞信」と言われていますが、親鸞聖人は、

きくというは、本願をききてうたがうころなきを「聞」といなり。また、きくと
くというは信心をあらわす御のりなり。〔一念多念文意〕

と解説されています。教えを聞くことが信心をいただくことなのです。普通、教えを聞いて、そうしてその教えを私が信じていることが信心だと考えられています。そうではなく、仏さまの教えを聞くことが、同時に信心（仏の心）をいただくことなのです。

念仏によって信心が与えられるのです。もつと言うと、私が「聞く」というより、「聞こえてくる」というほうが正確だと思います。阿弥陀仏の心が私に届くことが信心をいただくことですから。

罪を作らずには生きていけない凡夫の身であるという自覚が私たちにあるでしょうか。私自身、「自分が、自分が」という自分中心のあり方で生きています。そんな凡夫の身を生きている者であっても、教えを聞く人を白蓮華のような人だとお釈迦さまはほめられています。蓮の華は泥の中にあつて、しかも泥に汚されることのない清浄な華であることから、信心の人は蓮華にたとえられます。阿弥陀仏の本願をいただきたい者は、蓮の花のように煩惱という泥に染まることなく、往生が決定する身（正定聚）となるのです。

三 結誠

弥陀仏本願念仏 弥陀仏の本願念仏は、

邪見憍慢悪衆生 邪見憍慢の悪衆生、

信樂受持甚以難 信樂受持すること、はなはだもつて難し。

難中之難無過斯 難の中の難、これに過ぎたるはなし。

（阿弥陀仏の本願念仏は、邪見憍慢の悪衆生が信心を保つことがとても難しい教えです。難の中の難であつて、これに過ぎたものではありません）

「邪見」とは間違つた考え、すなわちお釈迦さまが覚られた縁起の道理を否定することです。縁とは条件です。因（原因）に縁が関係して果（結果）を生じます。その縁は無数にあるので、ちよつと条件が変われば、結果は全く違つてきます。ですから、私たちはさまざまに関わりの中でたまたま生かされているのです。それなのに、自分一人の力で生きていると思つている。それが邪見です。「憍慢」とは、おごりたかぶることです。思ひ上がつて見下す心です。世界は自分を中心にして動いていると、どこまでも自分を立てるのが私たちです。そういう「邪見憍慢」の人が「悪衆生」です。

自分がしたことなのに他人に責任転嫁することは、幼い子によく見られる自己防衛の姿ですが、大人になつても同じことをしがちです。イジメやパワハラなどによる自殺があると、学校、教育委員会、会社などはみんな責任逃れに汲々としています。公文書の改竄、隠蔽、廃棄が問題になつても、結局はうやむやで終わつてしまいます。政治が悪い、教育が悪い、親が悪い、社会が悪いと言います。しかし、自分が悪いと言つた人は聞いたことがありません。自分が一番かわいいのです。

そんな私が起こす信心はあやふやなものです。阿弥陀仏の本願を信じ、念仏を称えれば往生すると、言葉通りに信じられる人は少ないのではないのでしょうか。都合のいいことは信じますが、思うようにならなければだまされたと怒ります。仏の教えを聞いて、その時はうなずいても、無意識に自分のモノサシで解釈しています。そんな私の「自分が」という思いが崩れることによつて、「共に」という願いに生かされていたことに気づかされるのです。

第三章 依釈段えしやくだん

一 総讚そうざん

印度西天之論家 印度・西天之論家、
中夏日域之高僧 中夏・日域の高僧、
顕大聖興世正意 大聖興世の正意を顕し、
明如来本誓応機 如来の本誓、機に応ぜることを明かす。
(インドの諸師や、中国、日本の高僧たちは、お釈迦さまがこの世に現れた意義を顕かにされ、阿弥陀如来の本誓(本願)は救われるべき衆生に依じていることを明かしました)

西天さいてん インドのこと。

中夏ちゅうか 中国のこと。

日域じちいき 日本のこと。

大聖だいしやう お釈迦さまのこと。

機き 阿弥陀仏の本願によつて救われる者。

『正信偈』の後半は、インドの龍樹りゆうじゆ、天親てんしん、中国の曇鸞どんらん、道綽どうしやく、善導ぜんどう、日本の源信げんしん、源空げんくう(法然)という七人の高僧こうそうが相續された本願念仏の歴史が語られます。七高僧は、一切の凡愚こそが阿弥陀仏の本願(法)によつて救われる衆生(機)だと明らかにされました。私たちが『正信偈』のお勤めをすることは、本願念仏の教えが七高僧を通して親鸞聖人へ、そして私にまで届けられたことの不思議さ、有り難さを確かめていくことなのです。

二 龍樹章

釈迦如来楞伽山 釈迦如来、楞伽山にして、
為衆告命南天竺 衆のために告命したまわく、南天竺に、
龍樹大士出於世 龍樹大士世に出でて、
悉能摧破有無見 ことごとく、よく有無の見を摧破せん。
宣説大乘無上法 大乘無上の法を宣説し、
証歎喜地生安樂 歎喜地を証して、安樂に生ぜん、と。
(お釈迦さまは楞伽山で、南インドに龍樹菩薩が出て、有る・無いという邪見を破り、そして共に安樂浄土に往生するという大乘の法を説かれ、歎喜地という位に至るだろうと予言されました)

楞伽りやうが スリランカのこと。

天竺てんじく インドのこと。

大士だいじ 菩薩ぼさつのこと。
有無見うむけん 有見うけんと無見むけんのこと。
歡喜地かんぎち 仏ぶつになるまでの位のいの一つ。菩薩ぼさつの位のいの初地しよち。
安樂あんらく 極樂淨土ごくらくじゆん土のこと。

お釈迦さまが説かれた教えを聞き、道理を覚って仏になるのが仏教です。お釈迦さまが入滅された後、仏教は多くの部派ぶはに分かれました。部派仏教は、すべて存在には本質があるとし、事物を細かく分析する学問的な教えでした。そのため、仏教は僧院で生活する僧侶だけのものとなり、一般の人たちから遊離してしまいました。

その一方で、民衆の中にお釈迦さまを信仰することによって仏にならせてもらおうという救済の思想が生まれます。そうして、お釈迦さまが亡くなられて数百年たった紀元〇年ごろ、部派仏教を批判して自利他円満を説く大乘だいじやう（大きな乗り物）仏教の運動うんどうが起こりました。大乘では自利じり（自らが仏になること）よりも利他りた（他を救うこと）が強調されます。大乘は、自らの覚りだけを求める部派仏教を小乗せうじやう（小さな乗り物）と批判しました。自分が覚ることよりも他者を救うことを願うのが菩薩ぼさつです。こうして、仏教は一切衆生を救済する教えとなったのです。

南インドに生まれた龍樹りゆうじゆ（一五〇？～二五〇？）は縁起えんぎの法を基本に置き、空くうの思想を説きました。空とは、あらゆる存在はすべてお互いが関係し合って成り立っており、他と無関係に常に実在する存在はない（無我むが）ということでした。「有見うけん」は常見じやうけんともいい、不変ふへんの実体があるという考えです。しかし、すべての物事は無常むじやう（常じやうに変化する）です。「無見むけん」は何も存在しないという虚無こぼ的な考えです。龍樹りゆうじゆの説いた教えの流れながれを中觀派ちゆうくわんはといいます。

お釈迦さまは多くの教えを説かれましたが、その真意は大乘仏教にあるとした龍樹菩薩りゆうじゆぼさつは、中国や日本で八宗の祖として尊崇されています。真宗にとっても大切な存在です。

顕示難行陸路苦 難行の陸路、苦しきことを顕示して、
信樂易行水道楽 易行の水道、楽しきことを信樂せしむ。

（龍樹は、難行道は陸路を行くように苦しく、易行道は水路を行く船旅が楽しいようなものだと示されました）

龍樹菩薩は『十住毘婆沙論じゆじゆびばしやろん』の「易行品いぎやうほん」の中で、仏道には難行道と易行道があることを説きました。難行道とは、六波羅蜜ろくはらみつの行によって仏になる道です。陸路を歩くことにたとえられています。陸路は険しい道や茨いばらもあり、時には獣や盗賊にも出会う厳しい道です。それに対して、易行道は難行道に耐えられない凡夫ぼんぷのための道で、必ず歡喜地かんぎちという位いに至ることができません。歡喜地とは菩薩の修行段階しやうぎんたいかの一つで、再び三悪道さんあくだうに退転たいてんすることなく、必ず成仏じやうぶつできることが定まる位いです。正定聚しやうじやうじゆの位いともいいます。

私たちは「自分が、自分が」というはからいから離れられません。人間社会は、自分の利益と他人の利益が相反することもあります。他人の幸せが自分の喜びとなればいいのですが、正直なところ他人の幸せを素直に喜べません。人の不幸は蜜の味というように、共に喜び共に悲しむことができません。

そんな私が仏になること（自利）は容易ではありません。まして、迷いの中を流転する衆生を仏道に導くこと（利他）はさらに困難です。そんな私たちに、広く衆生が救われる道として阿弥陀仏の本願にまかせるというお念仏の教えを龍樹菩薩は説いてくれたのだと思います。

憶念阿弥陀仏本願 阿弥陀仏の本願を憶念すれば、

自然即時入必定 自然に即の時、必定に入る。

唯能常称如来号 ただよく、常に如来の号を称して、

応報大悲弘誓恩 大悲弘誓の恩を報ずべし、といえり。

（阿弥陀仏の本願を憶念すれば、おのずと仏になることが定まる位に入ります。ただ常に如来の名号（南無阿弥陀仏）を称えて、大悲の誓いの恩に報いなければいけない、と説かれました）

憶念^{おくねん} 心に念じて忘れないこと。

必定^{ひつじょう} 必ず仏になることが定まった位。正定聚、不退転と同じ。

如来号 阿弥陀仏の名号（名前）。南無阿弥陀仏のこと。

「必定に入る」とは、不退転に至るということです。不退転とは、仏になることが定まり、再び悪趣（迷いの世界）に退くことがないという意味です。龍樹菩薩は、厳しい修行に耐えることのできない私たち凡夫に、阿弥陀仏の名を称えることよって速やかに不退転地に至り、仏の智慧をいただくという易行道を示されたのです。阿弥陀仏の本願に生きる道が明らかとなったならば、阿弥陀仏の名を常に称えることよって報恩の心を新たにしている生活をしなければなりません。

三 天親章

天親菩薩造論説 天親菩薩、論を造りて説かく、

帰命無碍光如来 無碍光如来に帰命したてまつる。

依修多羅頭真実 修多羅に依って真実を頭して、

光闡横超大誓願 横超の大誓願を光闡す。

（天親菩薩は『浄土論』を造って、「私は無碍光如来に帰依いたします」と宣言されました。『無量寿経』によって真実を頭かにし、すみやかに浄土に往生させようという阿弥陀仏の誓願を説かれたのです）

論 『浄土論』のこと。『往生論』ともいう。

無碍光如来 阿弥陀仏のこと。
修多羅 經典のこと。ここでは浄土三部経（『無量寿経』『観無量寿経』『阿弥陀経』）のこと。

光闡 広く説きのべること。

天親（四〇〇？〜四八〇？）は世親ともいい、ガンダーラ（現在のパキスタン）の人です。兄の無著とともに厚く仏法に帰依されました。兄弟ともに部派仏教で出家しましたが、無著は仏教の真髄は大乗仏教にあると、大乗に帰依します。天親菩薩は部派仏教の教えを考究し続け、大乗を批判しましたが、無著に説得され、大乗の教えの深さに気づきました。この時、天親は自分の過ちを悔いて舌を切ろうとしましたが、無著はその舌で人々を救うようにと諫めたといわれています。無著、天親の兄弟が大成した思想を瑜伽唯識学派といえます。

多くの著書を残した天親菩薩は千部の論師と仰がれています。著書の一つが『無量寿経優婆提舍願生偈』（『浄土論』）です。『浄土論』の冒頭で、

世尊、我一心に尽十方無碍光如来に帰命して、安楽国に生まれんと願ず。

と、まず阿弥陀仏への自らの帰命を宣言されました。そして、阿弥陀仏の本願によって迷いの世界をとり越えて浄土に往生する（横超）と明らかにされた『無量寿経』こそが真実の教えであると説かれました。天親菩薩は阿弥陀仏の本願が大乗の至極だと いわれる礎を築かれた方なのです。

広由本願力回向 広く本願力の回向に由って、

為度群生彰一心 群生を度せんがために、一心を彰す。

帰入功德大宝海 功德大宝海に帰入すれば、

必獲入大会衆数 必ず大会衆の数に入ること獲。

（阿弥陀仏の本願力（他力）が差し向けられること（回向）によって一切衆生を救うために、他力の信心（一心）を明らかにされました。宝のような仏の功德の海に入れば、必ず浄土の人々の仲間に入れていただくことができるのです）

功德 善い結果をもたらす善い行為のこと。ここでは名号のこと。

度 覚りの世界に渡すこと。救うこと。

大会衆 往生が決定した仲間。

「回向」とは、普通は自分が積んだ功德を他に振り向けるという意味ですが、親鸞聖人は如来回向といわれています。「回向」の主語は私ではなく、阿弥陀仏です。私たちを救おうとする阿弥陀仏のはたらきを回向というのです。そして、阿弥陀仏の功德を私たちがいただくのが如来回向です。

阿弥陀仏の衆生を救うという願いを私がいただいたのが「一心」です。「一心」は私が起こす信心ではありません。私の救いは私一人だけが救われることではなく、他の

人々と共に仏道を歩むことです。阿弥陀仏の本願に順^{したが}って生きていくという宣言が「我一心」という表白です。

私たちは煩惱にまみれて生きています。自らの煩惱の強さに気づけば、我が身は仏道から遠ざかっているように思えます。しかし、仏の教えに背いて生きている私であったという痛みが深いほど、浄土を願う思いも深くなります。そこに真の仏道が実現されると、天親菩薩は教えてくださいました。このことを親鸞聖人は『高僧和讃』に、
本願力にあいぬれば

空しく過ぐる人ぞなき

功德の宝海満ち満ちて

煩惱の濁水へだてなし

信心すなわち一心なり

一心すなわち金剛心

金剛心は菩提心

この心すなわち他力なり

と、一心とは阿弥陀仏の本願力回向によってたまわった信心であることを示し、そこに仏道を歩む具体的な姿を表しています。

得至蓮華藏世界 蓮華藏世界に至ることを得れば、

即証真如法性身 すなわち真如法性の身を証せしむと。

遊煩惱林現神通 煩惱の林に遊びて神通を現じ、

入生死園示応化 生死の園に入りて応化を示す、といえり。

(浄土に至れば、ただちに真如法性という真実そのものの身になることが証明されま
す。煩惱の林に遊びながら、自由自在に不思議なはたらきによって迷いの世界に入り、
相手に応じた教化をすると説かれました)

蓮華藏世界 阿弥陀仏の極楽浄土のこと。安養浄土、安樂世界などともいう。

真如 真実そのもののこと。

法性 法の本質。真実の本質。

真如法性身 覺りを得た仏のこと。

生死 生まれ、死ぬこと。迷いの世界を輪廻すること。

応化 応化身のこと。仏が衆生に応じて姿を現す身のこと。

極楽浄土に往生すると、我々は真如法性の身、つまり仏の覺りを得た身となります。そして、私たちが生きる娑婆世界に戻り、苦悩する人々をさまざまな形で救済します。私たちが極楽往生を願うのは、自分が救われることよりも、心に浄土が開かれること
で仏道を歩む者となり、そうして阿弥陀仏の衆生済度(救済)のお手伝いをするとい
う意味があります。

といっても、救済しなければというはからいがあったては我執になります。菩薩の遊

戯げという言葉があります。が、「煩惱の林に遊ぶ」ということは、救済しなければという
とらわれから離れ、なおかつ自由自在に導くことを表しています。「生死の園で応化を
示す」とは、阿弥陀仏のはたらきがさまざまな形をとって示されるということだと思
います。

四 曇鸞章

本師曇鸞梁天子 本師、曇鸞は、梁の天子

常向鸞処菩薩礼 常に鸞のところに向こうて菩薩と礼したてまつる。

三蔵流支授浄教 三蔵流支、浄教を授けしかば、

焚燒仙経帰楽邦 仙経を焚燒して楽邦に帰したまいき。

（梁の皇帝は曇鸞のいる方角に向かつて常に礼拝されました。菩提流支が『観無量寿
経』を授けると、曇鸞は道教の経典を焼き、浄土の教えに帰依されました）

梁りょうの天子 梁の武帝（四六四〜五四九）の皇太子肅王。

三蔵流支 菩提流支のこと。

浄教 浄土教の経典のこと。

仙経 道教の経典。

南北朝時代に生まれた曇鸞どんらん（四七六〜五四二）は、『大集経』だいしつきょうという経典の註釈を作
ろうとしましたが、病氣になって中断せざるを得なくなりました。そこで、長生きを
すれば註釈が完成できると考え、道教の長生不老の術を学んで経典を授けられました。
喜び勇んで帰路についた曇鸞大師は、インドから来た菩提流支（？〜五二七）という
僧に出会います。菩提流支に道教の経典を見せ、「中国には長生不死の教えがある。イ
ンドにもありますか」と尋ねました。すると菩提流支はつばを吐き、「長生きすること
は仏教の求めるところではない」と言って『観無量寿経』を授け、「仏教には無量寿
（長さで量る必要のない命）の教えがある」と諭しました。本願の教えを知った曇鸞
大師は、自分の浅はかさを思い知り、仙経を焼いて浄土の教えに帰したのです。

この話は、私たちが仏教に何を求めているのかを深く考えさせます。自分の名声や
利益のために仏教を学ぶのでは、自分の欲を満たすために仏教を利用してはいるにすぎ
ません。仏教は私たちの思いを叶えてくれる道具ではありません。努力して解決でき
る問題もありますが、老病死のように自分の力ではどうすることもできないことがあ
ります。それなのに、自分の力で何とかできるはずだと思い、ままならない時には他
のせいになります。さまざまな不安や怖れの中にある私が今を生きる道を阿弥陀仏の願
いとおして教えていただくのです。

天親菩薩論註解 天親菩薩の『論』、註解して、

報土因果顕誓願 報土の因果、誓願に顕す。

往還回向由他力 往・還の回向は他力に由る。

正定之因唯信心 正定の因はただ信心なり。

(天親菩薩の『浄土論』を註釈して、浄土に往生する因も果も阿弥陀仏の誓願によると顕らかにされました。往相・還相の回向は阿弥陀仏の他力によるのであり、往生が正しく定まる因はただ信心だけであると説かれました)

論 『浄土論』のこと。

報土ほうど 菩薩の願が完成した浄土のこと。ここでは阿弥陀仏の浄土のこと。

往還回向おうげんえこう 往相回向と還相回向のこと。

正定しょうじょう 正定聚(仏になる身と定まる位)のこと。

曇鸞大師どんらんだいしは天親菩薩てんじんぼさつの『浄土論』の註釈である『浄土論註』を著しました。そして、浄土往生の仏道こそが大乗菩薩道だと説かれました。「回向」には二種回向といつて、二つの相(すがた)があります。往相回向おうそうえこう(浄土に往生すること)と還相回向げんそうえこう(衆生を救うこと)です。どちらも阿弥陀仏のはたらき(他力)であって、私の力(自力)で行うことではありません。

私たち凡夫が仏になる道は、まずはよき人(善知識ぜんちしき)の導きで教えに出遇うこと(還相回向)です。教えに出遇ったならば、自力の限界を思い知らされ、阿弥陀仏におまかせするようになります。自分の歩むべき道がはっきりする(往相回向)ことで、迷いの中にある人を見捨てないという阿弥陀仏の慈悲の心をいただき、仏の仕事の手伝いをしたいという心が起るのです(還相回向)。

「他力」とは人まかせだと誤解されがちですが、「他」とは他人ではなく、本願のことです。「力」ははたらきですから、「他力」とは本願力(本願のはたらき)です。親鸞聖人は「自力」を、

自力というは、わがみをたのみ、わがこころをたのみ、わがちからをはげみ、わがさまさまの善根をたのみひとなり。『一念多念文意』

と説明しているように、自分が」という心にとらわれていることです。また、

如来の二種の回向ともうすことは、この二種の回向の願を信じ、ふたごころなきを、真実の信心ともうす。『親鸞聖人御消息集』

と親鸞聖人はお手紙に書かれています。浄土往生(往相回向)も衆生教化(還相回向)も、どちらも本願のはたらきです。浄土に生まれる身と定まる(正定しょうじょう)のは、阿弥陀仏のまことの心(信心)をいただくことが因となると説明されました。

感染凡夫信心発 感染の凡夫、信心発すれば、

証知生死即涅槃 生死即涅槃なりと証知せしむ。

必至無量光明土 必ず無量光明土に至れば、

諸有衆生皆普化 諸有の衆生、みなあまねく化すといえり。

(煩惱に染った凡夫が信心をいただければ、生死(迷い)がそのまま涅槃だとわかりま

す。浄土に至れば、必ずすべての衆生を教化するようになると言われました)

惑染わくぜん 惑は煩惱のこと。染は煩惱に染まって汚れていること。
無量光明土むりょうこうみやうど 阿弥陀仏の浄土のこと。
諸有しよいうの衆生 あらゆる迷いの衆生のこと。

煩惱具足の身だと思ひ知らされたなら、阿弥陀仏の願いがこめられた南無阿弥陀仏（名号）を称えることが仏道を歩むことであり、生死（迷いの世界を流転すること）がそのまま涅槃への道だと知らされます。

親鸞聖人は「諸有」に「あらゆる」と注をつけています。迷っている凡夫と迷っていない人がいるのではなく、あらゆる人が迷いの衆生です。世界のあちこちで争いが絶えません。私たちの迷いの姿がそこにあります。そんな衆生を教化して導くのが仏のお仕事です。

五 道綽章

道綽決聖道難証 道綽、聖道の証しがたきことを決して、
唯明浄土可通入 ただ浄土の通入すべきことを明かす。

万善自力貶勤修 万善の自力、勤修を貶す。

円満徳号勸専称 円満の徳号、専称を勧む。

（道綽は、聖道門では覚ることは難しく、ただ浄土門だけが通りやすく入りやすいことを明かにしました。自力でいろんな善を修めることを退け、あらゆる功德をそなえた南無阿弥陀仏をもっぱら称えることを勧められました）

聖道しやうだう 聖道門（自力の修行によって聖者となり、この世で覚りを開く教え）のこと。

浄土じやうど 浄土門（浄土に往生して覚りを開く教え）のこと。

万善まんぜん 万行諸善の略。念仏以外の行のこと。

徳号とくごう 名号（南無阿弥陀仏）のこと。

正法しやうぽう、像法ざうぽう、末法まつぽうを三時といます。お釈迦さまが亡くなった後も教えを行じて覚る人がいる正法の時代。教えを行じる人はいるが、形（像）だけで覚る人がいない像法の時代。そして、教えに従って生きる人も、教えによって覚る人もいないのが末法の時代です。さらに、教えすらなくなってしまうのが法滅ほうめつです。正法、像法、末法の期間は諸説ありますが、道綽だうしやく（五六二〜六四五）はそれぞれを五百年としています。

末法に入ったとされる年から十一年目に、道綽だうしやくは十四歳で出家しました。ところが、北周の武帝が廢仏（五七四〜五七八）をしたために、寺院は破壊され、經典が焼かれてしまいます。道綽だうしやくも還俗げんぞくさせられました。末法という時代を道綽だうしやくは身をもって体験されたのです。

道綽だうしやくは『涅槃經』を学ばれていましたが、四八歳の時、玄中寺に詣でて、曇鸞とんらん大師の遺徳を記した碑文を読み、浄土の教えに帰入しました。曇鸞とんらんが亡くなって六十

年あまり後のことです。道綽禪師は亡くなるまでに『観無量寿経』の講釈を二百回以上もされ、人々に称名念仏を勧めました。そして、六四五年（大化の改新の年）に八四歳で命終されました。

道綽禪師の著作『安樂集』の中で、

当今、末法にしてこれ五濁悪世なり。ただ浄土の一門ありて通入すべき路なり。と示されています。末法という時代では、自力で修行する聖道門の教えでは覺りを得ることは難しく、浄土の教え、つまり阿弥陀仏の本願を信じ、もっぱら念仏を称えることを勧められました。

五濁悪世を生きる私たちは、個人の思慮分別や能力に頼る行では迷信邪教に墮ちることになる、聖道門の教えでは末法に生きる凡夫には間に合わない。末法の世に入ったことをそのように肌で感じた道綽禪師のお心がしのばれます。

三不三信誨慙 三不三信の誨、慙にして、

像末法滅同悲引 像末法滅、同じく悲引す。

一生造悪値弘誓 一生悪を造れども、弘誓に値いぬれば、

至安養界証妙果 安養界に至りて妙果を証せしむと、いえり。

（三不信と三信の教えを丁寧の説かれました。像法と末法と法滅という時代でも、念仏の教えは人々を導く。たとえ一生の間、悪を造っても、阿弥陀仏の弘誓（本願）に遇えば、極楽浄土に至ってさとりを得ると説かれました）

三信 淳心・一心・相続心のこと

誨 教えのこと。

慙 懇切丁寧ということ。

像末法滅 像法、末法、法滅（正像末の三時が終り、仏法が滅尽する時）のこと。

悲引 大悲によつて教えに導くこと。

安養界 極楽浄土のこと。

妙果 覺りのこと。

私たちは念仏を称え、仏の願いを憶念しても、救われたという実感を持つことができません。曇鸞大師は、煩惱具足の私がいくら念仏を称えても無明の闇が晴れないのは、名号に問題があるのではなく、私たちの信心は疑いが混じって純粹ではないので、私の心が阿弥陀仏の心と一つにならないからだと注意しています。

それが阿弥陀仏の本願に相応しない三不信（不淳、不一、不相続）ということだと曇鸞大師は指摘されました。不淳とは、仏の教えに深厚でない、あやふやな心です。不一とは、信心が一つではなく、心が揺れ動いて、あれもこれもという心です。不相続とは、疑いの心が雜じり、仏をたのむ心を保ち続けることができない心です。そうした私たちのあり方を親鸞聖人は和讃で、

浄土真宗に帰すれども

真実の心はありがたし
虚仮不実のわが身にて
清浄の心もさらになし

と告白されています。

私たちは本願のはたらきを南無阿弥陀仏という形でたまわっているのに、お念仏一つとうなずけません。そうした凡夫に道綽禪師は三信をねんごろに説かれました。三信とは、淳心（あつい心、純粹な心）、一心（このこと一つという心）、相續心（信が続く心）のことで、仏さまのお心です。

お釈迦さまは弟子から「知って犯す罪と、知らずに犯す罪とどちらが重いでしょうか」と問われ、「知らずに犯す罪のほうが重い」と答えられました。さらに、その理由を尋ねると、「人は自分のしていることが罪悪だという自覚がないと、その罪を重ねることになる。しかし、罪であることを知っていれば、悔い改めることができる。無明ほど罪深いことはない」と答えられました。

仏法を聞き、阿弥陀仏の本願に値うことによつて、悪を造り続ける我が身だと気づかされ、申し訳ないと頭が下がります。「値う」とは二つがぴったり合うという意味です。末法を生きる凡夫に、仏になる道、真実に目覚める道を歩んでほしいと道綽禪師は願われました。

六 善導章

善導独明仏正意 善導独り、仏の正意を明かせり。

矜哀定散与逆悪 定散と逆悪とを矜哀して、

光明名号顕因縁 光明名号、因縁を顕す。

（善導だけがお釈迦さまの真意を明かにしました。定善と散善という自力の行を修める人や、五逆や十悪の人を哀れみ、阿弥陀仏の光明と名号が因となり、縁となつて救われることを顕かにされました）

定善じょうぜんと散善さんぜんのこと。

逆悪ぎやくあく 五逆と十悪のこと。

矜哀じょうあい 深く哀れむこと

善導ぜんどう（六一三〜六八一）は隋の時代に生まれました。最初、『法華経』や『維摩経』を学び、道綽禪師が浄土教を弘めていると聞いて弟子となり、『観無量寿経』の教えを学びました。そうして浄土の教えに信順されました。その後、唐の都の長安に戻つて僧侶と俗人の教化に努めました。

そのころの念仏は観想念仏といつて、『観無量寿経』に説かれている定善じょうぜん観と散善さんぜん観の念仏です。定善とは、精神を集中して極楽浄土を想い描き、阿弥陀仏を目の前に見る行です。法然上人や親鸞聖人も比叡山で修行されましたが、覚めることはできませんでした。散善は、散乱した心そのまま浄土往生を願つて善を積み、悪を作らないこと

です。どちらも日常生活を過ごす人には困難な道です。

善導大師は、古今楷定ここんかいじょうといつて、『観無量寿経』は観想念仏による往生を説くものだという、それまでの解釈を否定し、お釈迦さまが説こうとされた正意は、定善や散善ができない凡夫を哀み、「南無阿弥陀仏」と称える称名念仏の道を示すことが説かれていると明らかにしました。定善と散善の教えが説かれたのは、勧めるためではなく、実践できないことの自覚を促したのです。「善導独り仏の正意を明らかにしたまえり」とはそういう意味です。

開入本願大智海 本願の大智海に開入すれば、

行者正受金剛心 行者、正しく金剛心を受けしめ、

慶喜一念相應後 慶喜の一念相應して後、

与韋提等獲三忍 韋提と等しく三忍を獲、

即証法性之常樂 すなわち法性の常樂を証せしむ、といえり。

(本願の大いなる智慧の海に入れば、念仏を称える行者は金剛のような信心をいただし、慶びの心がおこり、韋提希と同じ覺りを得て、物事の本質が常樂我淨であることを証すると言われました)

金剛心 信心のこと。

韋提 韋提希のこと。マガダ国の王妃。『観無量寿経』に出てくる。

三忍 忍とは認識、覺りのこと。喜忍、悟忍、信忍の三つ。

法性 法とは存在のこと。事物の本質、本性のこと。

常樂 涅槃の徳である常樂我淨のこと。

『観無量寿経』の冒頭には、マガダ国の阿闍世王子あじゃせが、お釈迦さまの弟子である提婆達多たいたたにそのかさされ、父の頻婆娑羅王びんばしやらおうを牢獄に閉じ込めて殺害し、助けようとした母の韋提希いだいけをも幽閉するという悲劇が書かれています。絶望の縁に立たされた韋提希は、憂いや悩みのない場所をお釈迦さまに求めます。お釈迦さまが阿弥陀仏の浄土を説かれるのを聞いた韋提希は、未来の衆生が救われる道を尋ねます。そうして韋提希は三忍という覺りを獲ました。

善導以前の解釈では、韋提希を「大権の聖者だいごん しょうじや」、つまり聖者が方便（救うための手だて）として凡夫という姿で現れたのであり、『観無量寿経』は聖者のための教えだとされてきました。しかし善導は、韋提希を「実業の凡夫じつぎょう」、すなわち苦悩や迷いを持つ現実の人間であり、『観無量寿経』は凡夫の救いを説いた經典であると解かれました。

また、散善で説かれる九品くほん（九種類）の往生の姿について、それまでは人間の能力や資質の優劣によって往生の仕方が違ふとされていたのを、善導大師は異なる縁によって生じる生き方の違いであり、どんな衆生も等しく往生すると説かれました。

源信広開一代教 源信、広く一代の教を開きて、
偏帰安養勸一切 ひとえに安養に帰して、一切を勧む。

専雑執心判浅深 専雑の執心、浅深を判じて、
報化二土正弁立 報化二土、正しく弁立せり。

(源信はお釈迦さまが一代に説かれた教えを広く学び、ひとえに阿弥陀仏の安養浄土に往生する教えに帰依しなさいと、一切の人々に勧められました。専修念仏の信心とさまざまな修行をする雑修の心との、浅い深いを判別し、真実報土と方便化土とを区別されました)

専雑 専は専修、念仏だけを称えること。雑は雑修、さまざまな行を修すること。

執心 固く動かない心のこと。

報化二土 真実報土と方便化土のこと。

弁立 区別をはつきりすること。

源信(九四二〜一〇一七)は、天慶五年(九四二)に大和国葛城郡当麻で生まれました。七歳で父と死別し、十三歳で出家します。非凡な才能を見せ、十五歳で法華八講という宮中行事の講師に任ぜられました。報賞として布帛(織物)を下賜されたので、源信は母に喜んでもらおうと、その布を送ります。ところが、母は歌を一首したためて布を送り返しました。その歌は、

後の世を 渡す橋とぞ思いしに 世渡る僧と なるぞ悲しき

というものです。「この世で苦しむ人々を仏さまの世界に渡してあげる橋の役目になる

と思っていたのに、世渡りをする僧侶になったとは悲しいことだ」と叱責したのです。源信僧都は母の戒めに従って名聞(名誉欲や出世欲)と利養(金銭欲や所有欲)の思いを断ち、その後は比叡山横川(よかわ)の首楞嚴院で、専修念仏を中心とする天台教学の領解を専らとされます。これを恵心流(えしんりゅう)と言い、その後の日本の浄土教の源流となりました。

源信僧都は自らを「頑魯(がんろ) (頑固で道理をわきまえないこと)の者」と言っています。だからこそ、

往生極楽の教行は、濁世末代の目足なり

と、念仏は私たちの目や足のようなものだと説かれました。そして、お釈迦さまが一生をかけて説かれた浄土の教えを一切衆生に勧められたのです。源信僧都は母の戒めを深く胸に刻み、すべての衆生が往生極楽を遂げる専修念仏の道を説いてくださいました。

さらに、念仏の教えを専修と雑修に分けられました。専修とは、阿弥陀仏の本願にまかせ、ただ念仏を申すことです。教えへの堅固な心(執心)が真実報土に向かう道だとなりました。雑修とは、念仏以外の行を雑じえることです。雑修は自己を頼む心があるのです、往生を願う気持ちには浅く、その身は方便化土に留まると注意しています。

浄土には真実報土と方便化土とがあります。報土とは、阿弥陀仏の本願が報いられ

た浄土です。方便とは、真実に近づくための手だてです。方便化土は、雑行雑修の自力の行者が思い描く浄土です。たとえば、蓮の花が咲き、鳥がきれいな声でさえずり、亡くなった人と再会する、そういう浄土は自力に執とらわれている人を真実の浄土に導くために仮に示された方便化土なのです。

極重悪人唯称仏 極重の悪人は、ただ仏を称すべし。

我亦在彼撰取中 我また、かの撰取の中にあれども、

煩惱障眼雖不見 煩惱、眼を障えて見たてまつらずといえども、

大悲無倦常照我 大悲倦きことなく、常に我を照らしたまう、といえり。

（罪の重い悪人はただ南無阿弥陀仏と称えなさいと勧められました。そして、私もまた、どんな衆生も救うという阿弥陀仏の撰取の本願の中にあるが、しかし煩惱に眼を覆われて見ることができないけれども、大悲は常に私を照らしてくださいさると言われました）

源信僧都に『往生要集』という書物があります。経典や論（経典の注釈）を引用しながら、地獄・餓鬼・畜生・修羅・人・天という六道や極樂のありさまが書かれています。もつとも、死んだらそういう世界に生まれるということではありません。私たちのあり方を六道で示したのです。

そして、凡夫である我々が極樂往生するには、専ら念仏を称えるしかないと説かれました。極重悪人とはこの上もない悪人という意味ですが、犯罪を犯す人ではありません。五逆（父を殺す、母を殺す、阿羅漢を殺す、仏身から血を流す、僧伽（教団）を壊す）を犯した者だけを意味するのではありません。欲にまみれ、不平不満を抱き、怒りの気持ちを持ち、他者を妬む、そういった三毒（貪欲・瞋恚・愚痴）の煩惱に振り回されて生きている私たち凡夫のことです。

また、親鸞聖人が『唯信抄文意』で、

りようし・あき人、さまざまのものは、みな、いし・かわら・つぶてのごとくなるわれらなり。

と書かれているように、悪人とは差別されている人たちのことでもあります。私たちは食べることによって他の命を奪っています。罪を作らなくては生きていけないのです。自分自身の本性に気がつけば、仏さまをたのまざるを得ません。ですから、親鸞聖人は、

他力をたのみたてまつる悪人（『歎異抄』）

と述べられています。つまり、悪人とは自覚の言葉であり、他人を責める言葉ではないのです。

私たちが気づかなくても、阿弥陀仏の光明に常に照らされています。阿弥陀仏の願いは罪の重さで人間を量ることはありません。念仏を称える時、阿弥陀仏の大悲の中にあることを知らされます。ところが、煩惱に覆われて阿弥陀仏の願いに気づきません。けれども、常に阿弥陀仏の慈悲の中にあると説かれる源信僧都のお心は、親鸞聖

人に受け継がれ、私たちに届いています。

八 源空章

本師源空明仏教 本師・源空は、仏教に明らかにして、
憐愍善悪凡夫人 善悪の凡夫人を憐愍せしむ。

真宗教証興片州 真宗の教証、片州に興す。
選択本願弘悪世 選択本願、悪世に弘む。

(源空は仏教を明らかにされました。善悪に惑う凡夫を哀れまれ、真宗の教えを世界の片隅にある日本で興し、阿弥陀仏が選択した本願を悪世に弘められたのです)

片州へんしゅう 日本のこと。

親鸞聖人の師である法然ほうねん房源空ぼうげんくうは(一一三三〜一二二二)は美作国久米南条の稲岡荘で生まれました。父の漆間時国は押領使おうりょうしという、地域の治安にあたる警察のような役でした。法然上人が九歳の時、敵対する近隣の武士に夜討ちをかけられ、非業の死を遂げます。父は死に臨んで、「敵を恨んではいけない。これは前世の宿業だ。もし敵を恨めば、将来は敵の子孫が恨み、恨みが尽きることはない。それよりも出家して私の菩提を弔い、自分自身の覚りを求めてほしい」と遺言しました。復讐を禁じたのです。この法然上人の話から、正義が人を傷つけ、争いを生じさせる教えられます。

法然上人は比叡山に登り、天台宗の教を学び、十五歳で大乗戒を授けられました。非凡な才能を認められましたが、地位や名誉を競う僧侶たちのありさまを厭い、十八歳で西塔黒谷に隠遁えいとんします。叡空えいくうに師事して勉学に励み、「智慧第一の法然房」と称されるほどになりました。

しかし、いくら勉強し、修行をしても、覚りを得ることができません。まして、苦しみをあえぐ人々を救うことはできません。悩んだ法然上人は一切経いっさいきやうを読み始めました。一切経とは大蔵経だいぞうきやうともいい、経、律、論を集めたものです。これを法然上人は五回も読んだといわれています。増上寺にある『高麗大蔵経』は全部で一五一八部六五九一巻です。

法然上人はやつと源信の『往生要集』の文章から善導の『観経疏』かんきんしゆをひもとき、五濁悪世に衆生が救われる道は、ただ口に念仏申して阿弥陀仏の本願に順したがうことだといふ専修念仏せんじゆねんぶつの教えに帰依しました。そうして、初めて浄土宗を開かれたのです。それまで浄土教は、仏教を理解できない人や修行ができない劣った人のための教えだときれていました。法然上人は浄土教こそすべての人のための教えだと明らかにされたのです。

親鸞聖人は二九歳の時に法然上人のもとを訪れて弟子となります。ところが、三十五歳の時、法然上人の教団は弾圧を受け、三人が死罪、法然上人は土佐に、親鸞聖人は越後に流罪となりました。

還来生死輪轉家 生死輪轉の家に還来することは、
決以疑情為所止 決するに疑情をもって所止とす。
速入寂靜無為樂 速やかに寂靜無為の樂に入ることは、
必以信心為能入 必ず信心をもって能入とす、といえり。
（流轉する家（迷いの世界）に戻るの疑いの心が原因である。速やかに寂靜無為の都（覺りの世界）に入るの信心が必要だと説かれました）

生死輪轉家 生死も輪轉も輪廻のこと。迷いの世界のこと。
所止 迷いの世界にとどまる理由。
寂靜無為樂 寂靜も無為も覺りのこと。樂は都のこと。
能入 入っていく原因。

法然上人が書いた『選択本願念仏集』の三心章に、
當に知るべし、生死の家には疑いをもって所止とし、涅槃の城には信をもって能入とす。

という言葉があります。迷いの世界（生死の家）から離れることができないのは、本願を疑う心があるからだ。仏の心をそのままいただくなら、覺りの世界（涅槃の城）に入ることができる。このように法然上人は言い切られました。

法藏菩薩が一切の衆生を救うために念仏を私たちに与えてくださった、そのお心が本願です。しかし私たちは、阿弥陀仏の誓いを疑い、自分の力で善根を積むことが浄土に往生する因となるんだと考えます。しかし、生死（輪廻）する生き方はそうした疑いの心にあるのです。人格を向上し、よりよい人間になって救われようとする思いが私たちにあるため、仏にまかせることができません。

外に賢善精進の相を現じて、内に虚仮を懐くことを得ざれ。

外に賢善精進の言葉を、親鸞聖人は、

外に賢善精進の相を現ずることを得ざれ、内に虚仮を懐けばなり。

と読み替えています。私たちは貪欲（むさぼり）、瞋恚（怒り、妬み）、愚痴（道理を知らない）という煩惱をなくそうと思っても、思ったはしから煩惱が湧き起こります。そんな私たちが作る善や行は「雑毒の善」「虚仮の行」だと、親鸞聖人は『教行信証』で言われます。

中に虚仮を懐いて、貪瞋邪偽、奸詐百端にして、悪性侵め難し、事、蛇蝎に同じ。
三業を起こすといえども、名づけて「雑毒の善」とす、また「虚仮の行」と名づく、「真実の業」と名づけざるなり。

いかに善いことをしたつもりでも、そこには煩惱という毒が雑じっているのです。私たちには至誠心（真実の心）、深心（信心）、回向発願心（善行を他の人に回向して共に浄土に生まれることを願う心）という三つの心はありません。阿弥陀仏からいただいたまことの心が浄土への道を開くと、法然上人はお示しく下さいました。

⑧ 結勸 けっかん

弘経大士宗師等 弘経の大士・宗師等、

拯済無辺極濁悪 無辺の極濁悪を拯済したまう。

道俗時衆同心 道俗時衆、共に同心に、

唯可信斯高僧説 ただこの高僧の説を信ずべし、と。

(教えを弘められた七人の菩薩や宗師たちは、無数の濁悪な衆生を救おうと教えを伝えてくださいました。出家も在家も共に心を一つにして、ただこの七人の高僧の教えを信じてください)

宗師 しゅうし 七高僧のこと。

極濁悪 ごくじよくあく 極重の悪人のこと。

拯済 じょうさい 拯も済も救うということ。

道俗 どうぞく 僧侶と在家のこと。

時衆 じしゅう 今の世の人々のこと。

七人の高僧は仏法に遇った人です。法(真実、道理、教え)に遇った人に私が出遇うことによつて、私も法に遇うことができます。そして、法によつて助かった人によつて、お釈迦さまの法が真実だと証明されます。『教行信証』の最後に道綽禪師の言葉が引用されています。

前に生まれん者は後を導き、後に生まれん者は前を訪え、連続無窮むくうにして、願わくは休止くしせざらしめんと欲す。

お釈迦さまの教えが私にまで至り届いたのは多くの先人たちのおかげです。『正信偈』に凝縮して説かれた浄土真宗の教えの深さを思うと、報恩謝徳の念をあらためて感じます。お念仏の教えを少しでも多くの人に伝えていくことが私たちの勤めです。

以上をもつて終わります。まことに不十分なことで、かえつて混乱されたかもしれません。どうもありがとうございます。